

三島由紀夫『春の雪』と『更級日記』

——いま一つの「典故」——

竹原 崇雄

序

三島由紀夫の『豊饒の海』第一巻『春の雪』の冒頭部に近い一文に次のような記事がある。

「私かもしれない急にあなくなつてしまつたとしたら、清様どうなさる？」（三八頁）¹

右引用の記事に接した時、『更級日記』の次の一文が頭をかすめた。

「たゞ今ゆくゑなく飛び失せなばいかと思べき」（四九六頁）²

『春の雪』では、聡子が清頭に対して、自らの喪失の予感を仮定の条件に提示して清頭の反応を問うているのに対して、

『更級』の方では、「姉なる人」が孝標女に対して、同じように喪失の予感を仮定の条件に提示して、その反応を問うている。しかも、その表現が、「もし急に」——「たゞ今」・「ゑなくなつてしまつたとしたら」——「ゆくゑなく飛び失せなば」・「どうなさる」——「いかと思べき」となつていて、形式にお

いてすべて対応している。

以上の指摘のみで、両者の関係の深さを云々するつもりはないが、『春の雪』の上記引用の一文に接した時に感じた『更級』との類似性は、その時以来強く印象に残つた。

この表現の類似性を感じるについては次のような前提となる事項があつた。それは三島の絶筆となつた『豊饒の海』の成立に関わつてゐる。三島はそれを執筆するにあつて、作品の完成と自己の肉体の喪失とを一体のものとして意図していた。それは、残酷こそ美の本質であるという逆説的命題を貫いてきた芸術家として、三島はその総決算をこの『豊饒の海』で実現することを図つていたという説明に置き換えることができる。だからこそ「実のところ、私はこの小説を完結させるのが怖い。一つはそれが半ば私の人生になつてしまつたからであり、一つは、この小説の結論が怖いのである。」³と述べているのである。「この小説の結論」こそ三島の芸術的人生の「結論」でもあつた。その悲壮な思想を背後から支えるのが転生の論理であつた

に相違ない。

『豊饒の海』第一巻『春の雪』巻末に次のように記している。後註―『豊饒の海』は『濱松中納言物語』を典拠とした夢と転生の物語であり、因みにその題名は、月の海の一つのラテン名なる Mare Foecunditatis の邦訳である。(三九四頁)

これによってみれば、『浜中納言物語』に描かれた「夢と転生」の世界を主題として『豊饒の海』四巻の構想を練り、第一巻『春の雪』を執筆したのであった。このところに、『浜松』と同じ作者、菅原孝標女の作品である『更級日記』が関係してくる理由が求められるのである。

『浜松』と『更級』との関係については、御物本『更級日記』の奥書に藤原定家が次のように記したところに由来する。

私たちのかみすかはらのたかすゑのむすめの日記也 倫寧朝臣のとのくはくうへのめひ也 よはのねさめ みつのはまゝつ みつからくゆる あさくらなどはこの日記の人のつくられたるとそ

この定家の奥書に記された『浜松』と『更級』との関係についての論は、これまで多くの先学の方々によってなされ、定家の奥書の信憑性は高い。三島もまた、「旧師松尾聰先生の校注になる『浜松中納言物語』の、全幅的に信頼しうるテキストが岩波から出た。これを何度も読むうちに、私の小説はこれにこそ依拠すべきだと考へた。」と述べているところからすると、その作者に擬せられている孝標女の日記である『更級』を読む

ということとは、資料考証の緻密な三島にあっては当然なされていたことであろうと推察される。そうだとすれば、『春の雪』の一節を書く際に、『更級』の一情景が念頭に浮かんで、小説の構想に関わって行くことは十分あり得ると思われる。本稿は以上の推論を実証してみたいと思つて試みるものである。

一

『春の雪』の冒頭は、「日露戦役写真集」の「『得利寺付近の戦死者の弔祭』と題する写真」の持つ限りない「悲哀」の感覚が漂う世界を描く。これは、『春の雪』の主題である松枝清頭と綾倉聡子との悲恋の世界を暗示するものであると同時に、『豊饒の海』第四巻『天人五衰』の空漠たる無の世界を終局として導き、更には、作者三島の死の運命を象徴する描写ともなっている。この「写真集」に描かれた「小さな白い祭壇と、花と、墓標」こそ、三島その人がそれへ向かつて「しめつけ」られていく終着点を示すものであった。佐伯彰一氏はこの情景のイメージについて「一切をひたすら死者に、死の方向に『集中』してゐる」として、これらは「巻末における主人公松枝清頭の死と照応しているばかりでなく、四部作全体をつらぬく死のテーマをいち早く鋭利なかたちで告知するもの」と分析された。小説の世界はこの巻頭に描かれた「墓標」へ向かつて収斂していく

のである。

この冒頭の暗い幕が上がって、舞台上の主人公清頭と聡子とに照明があてられる。紅葉の美しい十月のある日曜日、十四万坪の松枝公爵邸の池に浮かぶボートを見ながら、清頭は訪ねてきた友人の本多と次のような会話を交わしている。

貴様は何か運動をはじめるといいんだがな。本を読みすぎるわけでもないのに、万巻の書を読み疲れたやうな顔をしてゐる。

と本多はづけづけ言った。

清頭は黙つて微笑してゐた。なるほど本は読まない。しかし夢は頻繁に見る。その夜毎の夢の夥しさは、万巻の書も敵はぬほどで、いかにも彼は読み疲れたのだ。

……昨夜は昨夜で、彼は夢のなかで自分の白木の柩を見た。
(中略)

……さういふ焦燥がとめどもなく募るにつれて、目がさめた。そして清頭はひそかにつけてゐる夢日記に、昨夜のその夢を誌した。(二五頁)

右の引用文中の傍線①では「万巻の書を読み疲れた」、②では「夜毎の夢」、③では「夢日記」が要となつてゐる。この傍線①・②・③をたどっていくと、偶然かもしれぬが、『更級』の内容と重なってくる。『更級』の作者が「をばなる人」から「源氏の五十余巻、ひつに入りながら、……物語ども、一袋とりにいれて」もらつて帰り、「はしるゝ、わづかに見つゝ、心

も得ず心もとなく思ふ源氏を、一の巻よりして、人もまじらず、几帳の内にうち臥してひき出つゝ見る心地、後のくらひも何にかはせむ。昼は日ぐらし、夜は目のさめたるかぎり、火を近くともして、これを見るよりほかのことなければ」(四九二頁―四九三頁)と記されている孝標女の『源氏物語』に熱中する姿は、まさに「万巻の書を読み疲れたやうな顔」と表現するに相応しいと言ひ得よう。孝標女は読む、清頭は読まないという点では必ずしも一致するわけではないが、「読み疲れ」という構想の断片が作者の創作意識の中に醸されていたという点では一致すると考えてよいのではなからうか。逆に考えれば、「読まない」としてことさらに『更級』と同一の形にしないところに、三島の意図的な構想が跡を残していることもできる。

『更級』は以上の表現に続けて、『春の雪』と同様に「夢」を語る。

夢にいと清げなる僧の袈裟着たるが来て、「法華經五巻をとくならへ」といふと見れど、人にも語らず、ならはむとも思ひかけず(四九三頁)

このような夢を見たことを孝標女はこの『日記』に記している。それは、清頭が「夢日記」にその「夢を誌した」と同じである。『更級』には十一の夢が記されていることを考えれば、『更級日記』は孝標女の「夢日記」でもあつた。三島が依拠したという『浜松』には、転生の夢は語られていても、「夢」と

「日記」が結びつく内容は何も無い。「夢日記」の構想は『更級』に基づくものと考えられるのである。

二

序のところで述べた一文を含む『更級』の問題の箇所について考えてみたい。

その十三日の夜、月いみじく限なくあかき^①に、皆人も寝たる夜中許に、縁にいであて、姉なる人、そらをつくく^②と眺めて、「たど今ゆくゑなく飛び失せなばいかと思べき」と問ふに、なまおそろしと思へるけしきを見て、こと事にいひなして笑ひなどして聞けば（四九六頁）

右引用の傍線部の表現と関係があるのではないかと推察される『春の雪』の記事は次のように進めることができる。

清頭と友人の本多は、ボートを漕いで中ノ島へ渡った。そこからは池を隔てて遠く見える母屋の大広間の前庭に女達の姿が見られた。その中に聡子を認めた清頭はそこへ赴き、母と次のような言葉を交わしている。

「おどろきますね。あなた方は鳥で何をしてみたの？」
「ぼんやり空を眺めてみたんです。」（三四頁）

右引用の傍線部「ぼんやり空を眺めてみたんです。」の記事と『更級』の傍線②「空をつくく」と眺めて」の記事とが重なっている。これは、ストーリーの展開に直接影響を与える表現で

はないが、場面を構成する要素の一つに「空を眺めて」という「謎のやうな返事」を組み入れて、清頭の心の深みを描いたところには、案外、『更級』の「姉」の喪失の予感を湛えた傍線部②のような不気味な姿勢と共通するところを意図したものであったのかもしれない。「空」にある「目に見えないもの」の中に清頭が見たものは果たして何であったのか。『更級』の姉の「ゆくゑなく飛び失せ」る世界と重なるところがあるようにも思えてくるのである。

聡子達一行に清頭と本多が加わり紅葉を愛でながら山道を登っていく。九段の滝の第一の滝口のあたりから滝をふり仰いだ清頭は、そこに黒い犬の屍を見た。その場に居合わせた月修寺門跡の「回向して進ぜまつさかいに」の言葉を承けて、清頭の母が次のように言っている。

「御前様に回向していただくなんて、何といふ果報な犬でございます。きつと来世は人間に生れ変わることでございませうよ。」（三七頁）

右引用の傍線部に転生のことが描かれている。ここに描かれた転生は、『浜松』で中納言の父が唐の御子に転生するという構想との近似性よりも、『更級』の大納言殿の姫君が猫に転生することを描いた場面のように近いと思われる。松枝清頭が飯沼勲に、勲がジン・ジャン姫にという基本線は『浜松』に則つたものと言えるが、犬が人にといいのは、『更級』の人が猫にという形をとってきたものと思われる。『更級』の猫を描いた

部分は、前に引用した「その十三日の夜」の一段を挟んでその後後に位置している。因みに、この大納言殿の姫君が転生した猫は焼死する。それは、『豊饒の海』の各巻の主人公が死でもって結末を迎えるのと轍を一にする。

犬の屍を葬った後、聡子は手向けの花を摘みに行くと言って清頭を誘った。竜胆を見つけて摘む聡子の、着物の裾を透して感じられる「健やかな腰の捻り」を清頭は意識する。この一節に次の記事がある。

数本の竜胆を摘み終へた聡子は急激に立上つて、あらぬ方を見ながら従つて来る清頭の前に立ちふさがつた。そこで清頭には、つひぞ敢て見なかつた聡子の形のよい鼻と、美しい大きな目が、近すぎる距離に、幻のやうにおぼろげに浮んだ。

「私もし急にひなくなつてしまつたら、清様、どうなさる？」

と聡子は抑えた声で口迅くちびらに言つた。(三七頁—三八頁)

右の引用文中の傍線部の表現が、『更級』の前記引用の傍線③の部分と内容・形式ともに相似た表現となっていることについてはすでに述べた。ここで今すこし詳細に検討してみると共通点は次のような点にも見いだされる。

それは両者ともに、なんらこのような言葉、すなわち喪失の気配を漂わせた言葉が言われる状況ではないところに唐突に言い出されていることである。『春の雪』では花を摘み終えた聡子が「急激に立上つて」言い、『更級』では、月が出て

いる夜中縁に出ている時、空を見ながら言っている。「あらぬ方を見ながら」来る清頭にとつて、前に「立ちふさが」るようにして言う聡子の動きそのものも唐突であった。孝標女の場合も、「皆人も寝たる夜中」に月の風情を楽しんでいるときの唐突な言葉であつた。

このような形でなされた問いかけに対しては、その内容が内容だけに、それを聞く側の対応にも留意してみなければならぬ。『更級』の方では傍線④のように「なまおそろし」と不気味な言葉として受けとっている様子が描かれている。『春の雪』では、次のように表現されている。

尤も聡子は昔からそんな風に、故ら人をおどろかす口ぶりをすることがあつた。

……(中略)……

馴れてゐる筈なのに、清頭も、ついかう訊かずにはゐられない。

「ひなくなるつて、どうして？」

無関心を装ひながら不安を孕んだこの反問こそ、聡子が欲しがつてゐたものに他ならない。

「申上げられないわ、そのわけは」

かうして聡子は、清頭のコップの透明な水の中へ一滴の墨汁をしたたらす。防ぐひまはなかつた。(三八頁)

清頭は聡子の言葉に対して、水中に滴る「一滴の墨汁」のような「不安」を覚えたと描かれている。「なまおそろし」と

「不安」とは相似た感情を表現したものととることができると、この点でも両者は共通している。

以上のように、表現上の照応関係を検証してみると、この『春の雪』の冒頭近い部分に位置する清頭と聡子との紹介を兼ねた二人の関係を描く一連の記事は、『更級』の「その十三日の夜」の記事と、それを挟むようにして記されている大納言殿の姫君の猫への転生を描いた部分とを素材として構成されているのではないかとの感を深くするのである。

三

孝標女が「なまおそろし」という感情を抱いたのは、喪失の予感を秘めた姉の言葉の内容が直接の原因であろうが、前節における引用文の傍線①・②に述べている「隈なくあかき」「月」を「つく／＼と眺めて」言ったことも関係している。

平安時代の人々は、和歌や物語に月影の隈なき美しさを称え、山の端に隠れる月を惜しんだ。しかし、月は、単に情趣本位の美しい感懐を抱かせるだけのものではなかった。

『竹取物語』

三年ばかりありて、春のはじめより、(かぐや姫)月のおもしろ(く)出(で)たるを見て、常よりも物思ひたるさまなり。ある人の、「月(の)顔見るは忌むこと」(と)制しけれ共、ともしれば人まにも月を見ては、いみじく泣き給ふ。

『紫式部日記』

(五八頁)⁷⁾

もの思ひまさる秋の夜も、はしに出でゐてながめば、いとど、月やいにしへをめでけむと、見えたる有様を、もよほすやうに侍るべし、世の人の忌むといひ侍る咎をも、かならずわたり侍りなむと、はばかりれて、(四九六頁)⁸⁾

右の引用文によつてみれば、月光を忌むという風習が当時あったことがわかる。神田秀夫氏は、以上の他『伊勢物語』・『後撰和歌集』・『源氏物語』の「宿木」の例を引いて、「月の顔見るは忌むこと」というのは単なる俗信ではなく、『白氏文集』の「贈内」という律詩が影響を与えたものと説いておられる。⁹⁾熊谷直春氏・青井紀子氏も、月の面を見ることは不吉なことだとする習俗について詳細な考察を加えておられる。青井氏は、「神代の昔から、文明以前の闇の中から、人々の心の中にあつた月は、火葬の煙と共に空にのぼつた魂の行き着くところ」¹⁰⁾として、『源氏物語』の女君の死と月との関係の深さを指摘し、物語世界の構造の中に月と死によつて紡ぎ出される美的情趣の世界が組み込まれていることを論じておられる。

『更級』においても、この不吉な気配を漂わす月は次のように描かれている。

その五月の朔日に、姉なる人、子うみてなくなりぬ。(中略)母などはみななくなりたる方にあるに、形見にとまりたるおさなき人／＼を左右に臥せたるに、荒れたる板屋の隙よ

り月の洩り来て、ちごの顔にあたりたるが、いとゆゝしくおほゆれば、袖をうちおほひて、いま一人をもかき寄せて、思ぞいみじきや。(四九八頁)

姉の死後、その遺児を愛しむ孝標女の姿が描かれている場面であるが、傍線部は、月光を顔に受けることを不吉とする習俗・知識が孝標女にあったことを証するものとしてよいであろう。

この一文を前提として、「なまおそろし」という孝標女の感情の内実を探ってみると、「月いみじく隈なくあかき」時に「そらをつくく」と眺めて「いたという情況も原因として挙げる」ことができる。青井氏の表現を借用すれば、そこに、「『死』の場につながる」る気配を感じたからこそそこに起因した「なまおそろし」き感情であったに相違ない。『更級』においても、「月の顔見るは忌むこと」の習俗は生きているのである。

『春の雪』においては、前記引用の場面から十日ほど経過した時点で、二人の会話の内容を承けた形で月を中心とした記事が位置している。しかも、『更級』の場合と同様に、不吉な月光を描くことでその場を構成している。それは、清頭が十五歳になった「『御立待』の祝ひ」を回想する場面である。

それは旧暦八月十七日夜の月を、庭に置いた新しい盥の水に映して、供へ物をする古いしきたりであったが、十五歳の夏のその夜空が曇ると、一生運が悪いと云はれてゐた。

(中略)

清頭はしかし、天にかかる月の原像を仰ぐのが怖かった。

丸い水の形をした自分の内面の奥深く、ずっと深くに、金いろの貝殻のやうに沈んでゐる月のみ見てゐた。つひにかうして個人の内面が、一つの天体を捕獲したのだ。彼の魂の捕虫網が、金いろに輝く蝶を。

しかし、その魂の網目は粗く、一度捕えた蝶は、又すぐ飛び翔つてゆきはしないだらうか？十五歳の彼は、早くも喪失を怖れてゐたのだ。得るが早いか喪失を怖れる心が、この少年の性格の特徴をなしてゐた。一旦月を得た以上、今後月のない世界に住むやうになつたとしたら、その恐怖はどんなに大きいだらう。たとへ彼がその月を憎んでゐたとしても……。

(四四頁—四五頁)

三島は小説の中によく月の描写をとり入れる。それは月光の純粹さ・妖艶さ・希薄さとも関係している。月光姫の登場も毒蛇に噛まれて果てるという結末を考えると美しく儂い運命を象徴しているものと解することができよう。右引用の月の描写も一つの行事としての意義のみではなく、主人公清頭の「内面」世界の象徴であり、その運命を予兆するものであった。更に次のように続く。

——十五歳の十七夜の御立待のことを考へてゐるうちに、いつのまにか聡子のことをかんがへてゐる自分に気づいて、清頭は愕然とした。(四六頁)

月を聡子として読めば、それは「金いろに輝く蝶」として、清頭の「内面」深く棲むべきものであった。その「蝶」は、し

かし、「喪失」の予感を清頭の心に抱かせた。そして、傍線部に表現された「月のない世界に住むやうになったとしたら」という思いは、「月、即ち聡子のいない世界に住むようになつたとしたら」という不安に置換される。この不安こそ、数日前聡子が「私がもし急にあなくなつてしまつたとしたら」と言つた言葉に覚えた喪失の「不安」そのものを示すものであつた。月はやはり、「忌む」べき不吉な運命を予兆するものであつた。

『春の雪』の結末で、聡子は仏門に帰依し剃髪して尼となつた。清頭がいかに思いを深めても、手の届かぬ存在となつた。「ゐなくなつてしまつたとしたら」という「不安」の予兆は現実となつて清頭を「恐怖」の底へ突き落とす。「飛び翔つてゆきはしないだらうか」と「怖れてゐた」ことが現実となつて清頭を圧倒する。「月」は清頭の「内面」であり、「彼の魂」であつた。同じ意味で、聡子は彼の「内面」であり「彼の魂」であつた。聡子を喪うことは「彼の魂」を喪うこととなる。月が象徴する死の予兆はここに実現するのである。

月を見ながら「たゞ今ゆくゑなく飛び失せなば」といつた『更級』の「姉」は死に、『春の雪』では、「もし急にゐなくなつてしまつたとしたら」と言つた聡子の言葉を月光の夜の情景とともに思い起こした清頭の喪失の予感は実現する。単なる偶然とだけでは片づけられぬものが潜んでゐるらしく思えてくるのである。

更に付加すれば、三島の小説の一般的な型として、冒頭と結

末とが呼応している場合が多い。この場合もそれがあてはまる。『春の雪』は次の記事で幕を閉じる。

「今、夢を見てゐた。又、会ふぜ。きつと会ふ。滝の下で」
本多はきつと清頭の夢が我家の庭をさすらうてゐて、侯爵家の広大な庭の一角の九段の滝を思ひえがいてゐるにちがひないと考へた。

——帰京して二日のちに、松枝清頭は二十歳で死んだ。

(三九四頁)

第二巻『奔馬』において、本多は滝の下で飯沼勲に會つて転生した清頭だと確信する。この点で、巻末の記事は第二巻を導くものとなつてゐると同時に、右引用文中の「九段の滝」が、冒頭の一段に應じて転生の場を導くものとして位置づけられてゐることに注意したい。滝口のところで屍になつた犬が「来世は人間に生れ変る」とすれば、この巻末の記事は、九段の滝を思い描きながら世を去つたであろう清頭の転生を予兆するものとして記され、冒頭と結末を結ぶ呼応の構図によつて組み立てられてゐると考えることができる。

『春の雪』冒頭近い部分の表現が、この小説の構成の中で占める位置は大きい。この重要な一節を、三島は、『浜松』の作者その人が、自らの実人生の思い出の記録として書き残した『更級日記』の一節を「夢日記」としてその構想の基底に据えながら、創作の筆を執つたに違いないと推察するのである。

四

『豊饒の海』とその「典拠」となった『浜松』との関係を具体的に指摘される先学の中で、對馬勝淑氏は、三島自身が「積極的に自作と藍本との比較検討をするように要求していると解釈すべきではないだろうか」として、「積極的」に『浜松』との関係を分析しておられる。この對馬氏の方法は高く評価されるべきではなからうか。なぜならば、小説の構成に緻密さを要求する三島だからこそ「典拠」を示すことで、その典拠との関係の謎解きを読者に迫っているともとれるからである。その謎の一つに組み込まれていたのが隠された『更級』であったのではなからうか。

三島は、岩波の古典文学大系の『浜松中納言物語』の月報に「夢と人生」と題した一文を寄せ、その冒頭に次のように記している。

松尾先生はすぐる戦争の時代に、悠々と、王朝の散佚した物語の研究をつづけておられた。徒然草の『不具なるこそよけれ』ではないけれども、のこる断片からありし全容の美しさを偲ぶといふこの作業には、戦争中の誰も知らなかつたダンディズムがあつて、私は保存の完全な物語類よりも、先生の研究によつて知つた物語の類に、一層の想像力を掻き立てられたのであつた。¹³⁾

「夢と転生」をモチーフとして、とくに『浜松』の「失亡首巻」を藍本としたのは、これまた對馬氏が述べられるように、「他の資料」から「『あるべき姿』を想像する」という創作手法と直結し、これこそ「のこる断片からありし全容の美しさを偲ぶ」という三島のロマンに支えられたものであつたと言ふことができるであらう。

以上のような視点に立てば、『浜松』の作者の「日記」である『更級』の中から、「喪失」と「転生」を描いた印象的な一場面を、「ありし全容」（『浜松』）に深く関わるものとして、「典拠」に絡ませて構想の中に組み入れることは容易にあり得ることと思われる。三島が遺したものである中で、『更級』に関するものとしては、学習院に在学中に図書館懸賞論文に入選した「王朝心理文学小史」¹⁴⁾がある。そこで『更級』について「強烈な憧れ、しかも遂に実現されることになつた熱情的な夢の叙述」と説き、「この夢幻と憧憬は、王朝ぶんげいの最後の赫灼たる光輝であり、頽廢の一步手前の理想の窮極」を表現したものと論じている。三島は『更級』の夢幻の美に陶醉している。更に当時、清水文雄・松尾聰という平安時代の日記・物語を研究しておられた兩先生に師事していたことを考えると、その講義の中で、『更級』について言及されるところはあつたと推測できる。因みに、松尾氏が『更級』の中に書名がでてくる『かばね尋ぬる宮の物語』についての考証を「文芸文化」に発表されたのは、昭和十五年五月である。学習院中等科在学中の三島

が、その師清水文雄氏の紹介で同じ「文芸文化」に「花ざかりの森」を連載し始めたのが十六年九月からである。両先生の影響は強い。「かばね尋ねる宮の物語」は、『更級』の「姉なる人」が読みたく思っているが果たせず、その死後になって届けられたものとして印象的に記されている。

『三島由紀夫書誌』¹⁵に掲載されている「年譜」によれば、昭和十九年十月の項に「処女作品集『花ざかりの森』が七丈書院より出版される。初版四千部が一週間で売り切れた。印税で古本を買い集める。」とある。二十年五月の頃に「大学の勤勞動員で神奈川県海軍高座工廠の寮に入る。そのころ、『和泉式部日記』『上田秋成全集』『古事記』『日本歌謡集成』『室町時代小説集』『泉鏡花』などの書物に親しむ。」とある。「買い集め」た「古本」の中に『更級』も含まれていたかもしれない。三島の作品と古典との関係は深いのである。

また、「夢と人生」の、前に引用した部分に続いて、次のように記している。

私はその一つ『朝倉の物語』から、先生の考証をたよりに、小さな自分用の「朝倉」といふ物語を組立てたりした。

松尾聰氏の散佚物語の研究の一つである「朝倉の物語」¹⁶は、『文芸文化』に昭和十六年十月から十七年六月までの間に掲載されている。この散佚物語の『朝倉の物語』は、『更級』に記されている定家の「奥書」の中にも『あさくら』として出てくる物語の名で、『更級』と同様に孝標女の作として伝えられて

いるものである。松尾氏はその論文の中で『朝倉の物語』と『更級』との類似点を列挙しておられる。この『朝倉の物語』を「典拠」として、三島が『朝倉』¹⁷を創作するに当たって、その作者の日記である『更級』に触れていたであろうという可能性は強い。

ところで、三島の『朝倉』の中に、典拠とした『朝倉の物語』とは関係のない挿話が組み込まれている。それは『朝倉』の主人公三位の中將の同僚が語った話として記されている。語り出しの一節は次のようになっている。

—その同僚には一人娘がいる。やつと十歳である。秋のころからむすめが籠もり勝ちになる。父は不審に思った。乳人の話では密かに通ふ人があるといふ。しかし女にはそんな様子もみえない。あまり幼なくて本当のこととも思はれぬ。はしたない仕業と思ひながら父はかくれて隙見してゐた。月の明るい晩で、庭には薄雪が斑にのこつてある。笛を吹いてくるものがある。しかし笛の音は息が長くつゞかぬやうですこしかすれてきこえる。それが大へん可愛らしくきこえた。

入つてくるのをみると本当に幼なげなので一段と微笑ましく思ふ。(中略)あとでわかつたことだが何でもやんごとないあたりの若者だといふ。……

「月の明るい晩」に「笛を吹いてくる」という発想は、どこにでも見られる描写の一つではあろうが、『更級』の「十三日の夜、月いみじく隈なくあかき」の段と奇妙に似ているとこ

ろがある。姉の「たゞ今ゆく多なく飛び失せなば」の一節に続いて、一人の貴人が「萩の葉」なる女性を訪れる場面が描かれる。男は女に会えずに笛を吹いて立ち去っていく。

「萩の葉〜」と呼ばすれど、答へざなり。呼びわづらひて笛をいとおかしく吹き澄まして過ぎぬなり。(四九六頁)

一方は「笛を吹いてくる」、他は笛を吹いて去る、異なった設定ではあるが、男と女・月・笛という情況を構成する素材は相似たところがある。

この挿話がいま一つ『更級』と重なる内容を見せている点を見落としてはならない。ここに登場する人物は、「十歳」の「女」で、「秘かに通ふ人がある」にしては、「あまり幼なくて本当のこととも思はれぬ」と紹介されている。通つて来る若者も「幼なげな」と説明されている。『更級』に描かれた内容で、この二人の人物の描写に関係があるように思われる記事は次の一節である。

又きけば、侍従の大納言の御むすめなくなり給ひぬなり。殿の中将のおぼし嘆くなるさまわがもの悲しきををりなればいみじくあはれなりと聞く。(四九一頁)

右の一文は、藤原行成の娘と道長の子息長家のことについて記した件である。この二人のことについては、『栄花物語』に詳しく描かれており、それによれば、二人の結婚の時の年齢は「女君は十二、男君は十五」(「もとのしづく」)であり、それは「雛遊のやう」(「あさみどり」)であったという。二年

後姫君は死去する。三島の『朝倉』と表現の上で似通っているのは、『朝倉』の二人の描写が「幼くて」・「幼なげな」になっているのに対して、『栄花』では二人を、「女君いと稚くおはすれど」・「まだこれ(男君)も稚くおはすれば」(「あさみどり」)と説明している点であり、更に、『朝倉』では男君が「やんごとないあたりの若君」とされていて、道長の子息長家のことを記した『更級』・『栄花』の内容と符合する。

以上のことから推論すれば、三島は、『更級』の「侍従の大納言の御むすめ」の話を読み、更に『栄花物語』にあたって調べた上で、この挿話を創作し、「右は朝倉君とは関係のない話だけれど」とことわって、物語に情趣を加えるべく挿入したものである。

このように考えてくると、三島は『朝倉』を執筆するにあたって、その作者が書いた日記である『更級』を読んでいたのであろうと推定することはできるであろう。『栄花』に依ったとしても、そこへ行くまでには『更級』を経由したはずである。月夜の笛の音という発想が『更級』に基くものとすれば、幼い恋人の話も、やはり『更級』の記事が端緒になっていると考えてよいのではなからうか。付言すれば、死去した侍従の大納言殿の姫君は猫に転生して「姉」の夢の中に現れて夢告をするのである。

佐藤秀明氏は三島の作品と藍本との関係について「横溢する観念を枠組みに追ひ込む事で構造化し、具体的な事物を先行作

品から〈引用〉することで、作品のリアリティを強化し、同時にその事物に新たな観念を付着させる」と述べておられる。『更級』との関係は深い。それは作品の「枠組み」に影響を与え、作品の成立の根幹たる主題とも密接に関わっていると考えられるのである。

五

『朝倉』を執筆したのが昭和十九年、『春の雪』との間には二十余年の年月の隔たりがある。しかし、この年月は、三島の『更級』に寄せる思いの強弱とは関係がないように思える。小高根二郎氏が昭和四五年三月に『蓮田善明とその死』を刊行された。三島の自決の年である。三島はそれに序文を寄せて次のように記している。

雷が遠いとき、窓を射る稲妻の光と、雷鳴との間には、思はぬ永い時間がある。私の場合には二十年があつた。そして在世の蓮田氏は、私には何やら目をつぶす紫の閃光として現はれて消え、二十数年後に、本書のみちびきによつて、はじめて手ごたへのある、腹に響くなつかしい雷鳴が、野の豊饒を約束しつつ、轟いて来たのであつた。¹⁹⁾

三島は二十数年前の善明の声を、自決を数箇月後に控えて「腹に響くなつかしい」ものとして聞いている。そして、その「なつかしい」感情は善明の自決と自身の自決とを一本の紐帯

で結び、その芸術的人生の総決算としての「豊饒」を夢みつつ人生の幕を引くのである。善明が三島の心に生きる人であったとするならば、自己の作家としての記念すべき出発点としての学習院中等科・高等科時代の恩師清水・松尾両先生の講義のお声も「なつかしい」ものとして『更級日記』の一節とともに甦ってきたものであつたに相違ない。

『浜松』の転生の論理に加えて、『更級』の思い出に残る一節を「腹に響く」ものとして、最後の作品とすべき『豊饒の海』第一巻『春の雪』の冒頭を構成する「典拠」として、巧みに採り入れたのであつたと推定することは許されよう。『朝倉』執筆の場合も、『春の雪』も、ともに同一箇所をとってきていることを考えると、三島にとって、『更級』に描かれた侍従の大納言の姫君の話・物語に耽溺する話・姫君が転生した猫の話・月夜の姉の話・萩の葉の話という一連の内容は、特に印象深いものであつたのではなからうか。

三島にとって最期であるとの思いをもつてとり組んでいる作品に、純粹に美を求めた若き日への思いが甦ってきたとしても何も不思議ではない。清頭や本多には若き三島が投影されている。そこでは、『朝倉』も、学習院時代の講義も、善明の声も、『更級』についての記憶も、一如となって物語りの世界を構成する核となっているのではなからうか。それらの延長線上に『浜松』は位置づけられている。『浜松』が「典拠」とされているところには、そこに「転生」が描かれているという意味だ

けではない。それへ至るまでの当然の道程を辿ることができるのである。その過程を考えると、三島にとつての『更級』と『浜松』は因縁と呼んでもよいような糸によって結ばれているようにも思えてくる。『春の雪』を書く三島によって、『更級日記』が「夢と転生」を語るいま一つの「典拠」として定位されたのは、ごく自然な選択であったと言えるのである。

〔注〕

- (1) 『春の雪』(『三島由紀夫全集』第十八巻 昭和四八・六 新潮社) 引用にあたって漢字の表記を改めた箇所がある。傍線等は筆者による。
- (2) 『更級日記』(『日本古典文学大系』昭和三二・一二 岩波書店)
- (3) 三島由紀夫「『豊饒の海』について」(『全集』第三十巻 昭和五一・二)
- (4) 橋本不美男編『御物 更級日記』(昭和五二・四 笠間書院)
- (5) 前掲注(3)
- (6) 佐伯彰一「解説」(『春の雪』 新潮文庫 昭和五二・七 新潮社)
- (7) 『竹取物語』(『日本古典文学大系』昭和三二・一〇 岩波書店)
- (8) 『紫式部日記』(『日本古典文学大系』 昭和三三・九

岩波書店)

- (9) 神田秀夫「『月の顔見るは忌む』ということについて」(『古今和歌集』『日本古典文学大系』月報 昭和三三・八 岩波書店)
- (10) 熊谷直春「『月の顔見るは、忌むこと』私考」(『芸文東海』 昭和五八・六)「深刻とは言えないまでも、かなり気にしていた俗信であった」と述べておられる。
- 青井紀子「月の顔に向ひたるやうなる―落葉の宮―」(『中古文学論攷』第十〇号 平成元・一二)
- (11) 青井紀子「月と死と」(『中古文学論攷』第十一号)
- (12) 對馬勝淑「『豊饒の海』と『浜松中納言物語』」(『三島由紀夫『豊饒の海』論』 昭和六三・一 海風社)
- (13) 三島由紀夫「夢と人生」(『全集』第三一卷 昭和五〇・一一 新潮社)
- (14) 三島由紀夫「王朝心理文学小史」(『輔仁会雑誌』 昭和五五・二)論文末尾に「〔完〕 昭和十七年一月三十日」の日付がある。学習院の図書館懸賞論文に入选したもの。
- (15) 三島瑠子 島崎博共編『定本三島由紀夫書誌』(昭和四七・一 薔薇十字社)
- (16) 松尾 聰「朝倉の物語」(『平安時代物語の研究』 昭和三〇・六 東宝書房)
- (17) 三島由紀夫「朝倉」(『全集』第一巻三九七頁 昭和五〇・一 新潮社)

- (18) 『栄花物語』(松村博司『栄花物語全注釈』三 昭和四七・六 『全注釈』四 昭和四九・一 角川書店)
- (19) 佐藤秀明「解説 — 『三島由紀夫』という問題」
(『三島由紀夫 美とエロスの論理』日本文学研究資料
新集 平成三・五 有精堂)
- (20) 三島由紀夫「序」(小高根二郎『蓮田善明とその死』
昭和四五・三 筑摩書房)

(第五回卒・熊本県立大学)